

## 福岡・雀居遺跡 ささい

- 1 所在地 福岡市博多区福岡空港内
- 2 調査期間 一九九一年(平3)一〇月～十二月
- 3 発掘機関 福岡市教育委員会
- 4 調査担当者 下村 智
- 5 遺跡の種類 集落跡・水田跡
- 6 遺跡の年代 一〇～一一世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(福岡)

雀居遺跡は、福岡平野の東側に位置し、御笠川の右岸に広がる遺跡である。初期稲作農耕で有名な板付遺跡の北方2kmの位置にあたる。現況は福岡空港用地で、一九七二年まで米軍の板付基地となっていた。戦前の地形図によれば、周辺には水田が広がり、微高地が部分的に分布している状況であった。現在は改変され、標高5m前後の平坦地となっている。

雀居遺跡の調査は、運輸省の空港整備事業に関わるエプロン増設工事の事前調査として実施したものである。事前の試掘調査によって遺跡の範囲は二二〇〇㎡に及ぶことが明らかになっている。その内、一九九一年度分工事範囲内の一七〇〇㎡を調査対象とした。

調査の結果、上下二面の遺構群が検出された。第一面は、標高四・四五～四・一五mを測り、淡青灰色シルトと褐色砂層を基盤として、土坑六六基、溝五条、井戸三基、ピット四七個が確認された。土坑は、径1m前後から4mを超えるものまであり、円形、楕円形、不整形、不定形を呈し、断面は皿状に窪む。井戸は、素掘りのものと井筒に曲物を用いるものがある。溝は、南東から北西に流れる自然流路と、北西―南東方向、西南西―東北東方向をとる二条の区画溝がある。区画溝は、幅一・八～三・〇m、深さ〇・三m前後である。

第二面は、標高四・一五～三・六五mで、水田跡と溝が確認された。黒色粘質土が基盤となっている。畦畔、足跡がよく残っており、畦畔はT字状に接合している。溝は幅一六・三mの大溝で、東南から北西側に流れている。西岸には護岸用の杭列が二七mにわたって検出された。

遺物の出土量はあまり多くなく、整理用コンテナ三二箱分である。第一面の土坑及び溝からは、炭化した米や麦とともに内黒及び黒色の土師器が多く出土している。滑石の石鍋片が数点、輸入青白磁は

ごく少量出土しているに過ぎない。木簡は、第一面の北西から南東方向をとる区画溝の底から出土した。自然流路では木製品の残りが良好で、建築部材、曲物、機織具の榎、斎串などが出土している。第二面の大溝からは土師器、曲物、横櫛などが出土している。その中で、内黒土師器碗の外底部に「天上」と墨書したものである。時期は、第一面が一〇〜一一世紀、第二面が一〇世紀に属すると思われる。

雀居遺跡は、今回が初めての調査であり、平安時代後期から末期の遺構、遺物を検出したが、周辺の様子が分らないので遺跡の性格を判断しにくい。第一面では、区画溝と共に柱穴を検出したが、建物としてはまとまらなかった。

遺跡の立地する旧席田郡には、『和名抄』によれば平安期に石田、大国、新居の三郷があったとされる。『延喜式』兵部省式諸国駅伝馬条には、筑前国一九駅のひとつに久邇駅がみえ、駅馬一〇疋を常置していた。久邇駅は、粕屋郡夷守駅から大宰府に向う途上の駅で、席田郡大国郷に所在したとされる。現段階では郡衙や郷の確定もできていないが、席田郡内には駅家や郡衙、郷などの関連施設が存在した可能性があり、今後の調査を含めて検討が必要であろう。

# 8 木簡の釈文・内容

(1)



(177)×25×5 081

六文字分を確認できるが、遺存状態が悪く判読できていない。下三文字はやや残りはよいが偏の大部分が欠損している。旁から類推すると、順に「陶」「汝」「治」もしくは「貽」か。

(下村 智)

